

しもかわふち 下川淵 地下 マップ

*本市刊行の発掘調査報告書は、奈良文化財研究所「全国遺跡報告総覧」からダウンロードすることができます。



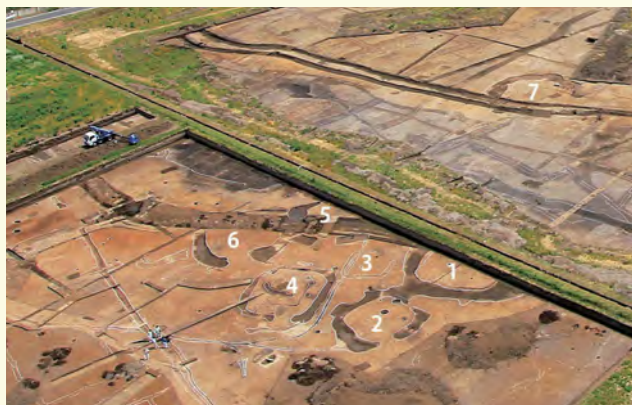
◆地理的な特徴

本地域は、約2.4万年前の浅間山の山体崩壊に伴う岩屑なだれ（前橋泥流）によって形成された前橋台地上に位置します。台地上を流れる小河川は泥流による堆積物を深く浸食できず、網目状に流れた結果、微高地と低地が入り組んだ地形を形成しました。縄文時代草創期（1万2000年前頃）に人々が暮らした痕跡（徳丸仲田遺跡、公田東遺跡、公田地尻遺跡）が見つっていますが、古墳時代以前の遺跡はとて少なく、本格的に集落が形成されるのは古墳時代前期からです。古墳時代には組織的な大開発が行われ、微高地上に集落が作られ、低地に水田が開発されていきました。

◆東海地方にルーツを持つS字甕の普及

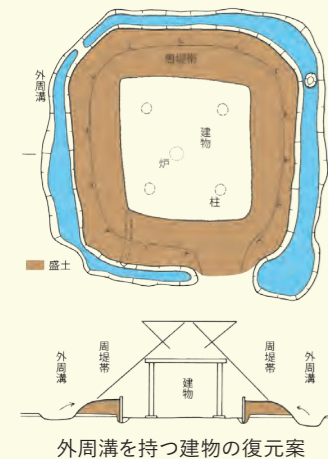
①②南部拠点地区遺跡群No.10、11

古墳時代前期（3世紀後半～4世紀代）、東海地方にルーツを持つ口縁部がS字状の土器「S字状口縁部付甕（以下「S字甕）」を使用する人々が、群馬県に新しい用水技術や高度な配水技術をもたらし、水田開発が進められました。同時に、竪穴建物の周りに溝を巡らせ、浸水を防止する「外周溝を持つ建物」の構築方法が伝えられ、微高地でも地下水位の高い本地域などで居住が可能となり、一段と開発が進みました。「外周溝を持つ建物」は南部拠点地区遺跡群、横手湯田遺跡などで20軒以上確認されています。ただ、古墳時代中期以降、こうした建物の姿は消えており、微高地にも水田開発が進んだようです。



水田の下から現れた古墳時代前期の集落

時期は前後するが、外周溝を巡らす竪穴建物跡（数字で示したところ）が連なる。手前がNo.11遺跡で、上方はNo.10遺跡の建物跡。



外周溝を持つ建物の復元案

◆S字甕の特徴

S字甕は、厚さが1～3mmと極端に薄く、胴部にはハケ目と呼ばれる細かい線形がつけられ、口縁部は2段にS字状に屈曲した特徴的な土器です。古墳時代中期にカマドが導入される以前、竪穴建物の中の炉に置いて、火が効率よくあたるように台が付き、熱が良く伝わるように薄く改良されたものと言われています。



S字甕の口縁部の拡大写真



左上写真・7の建物跡の外周溝から出土したS字甕を含む土器群（南部拠点地区遺跡群No.10）

ほとんどの器種が東海系といわれる土器で、3世紀末頃のものと思われる。

◆榛名山ニツ岳の火山灰に埋もれた古墳時代のミニ水田

②③南部拠点地区遺跡群No.11、12

南部拠点地区遺跡群No.11、12で、6世紀初頭の榛名山ニツ岳噴火による火山灰に埋もれた極小区画の水田（古墳時代に県内で多く確認されている水田面積は3㎡前後、本遺跡は谷地形に影響され5㎡程）が25面確認されました。北側の横長の大きな水田で水路から流れてきた水を一度ためてから配水し、全区画に水を行き渡らせていたと考えられます。水口のない所は田越しに水を流していたと推測されます。こうした水田は一見非効率に見えますが、近年の研究で地形を利用し効率的に水管理を行うことに適した水田であることがわかりました。その後、牛や馬に鋤をひかせて田畑を耕す牛馬耕の導入により水田区画が拡大したといわれています。

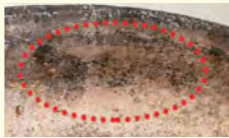


6世紀初頭の水田跡

右図No.11遺跡の北から撮った写真。白い線が水田の畦畔



- 発掘したところ
- 古墳 ○ 周溝墓
- 平安時代の水田畦畔(あぜ)
- 坪境畦畔(大畦畔)
- 環濠遺構
- 調査で見つかった屋敷跡



吹きこぼれ痕と思われる溝上のシミ

0 1:20,000 1km



天地返し模式図

◆条里水田の開発時期はいつ？

②③南部拠点地区遺跡群No.11、12

本地域では、天仁元（1108）年の浅間山噴火による軽石（浅間B軽石）によって埋没した条里水田が多数確認されています。条里制の一坪の単位とほぼ同じ長さの109～110m間隔の大規模な畦畔（あぜ）が、碁盤の目のように設けられていました。こうした条里水田の開発がいつ頃始まったのか不明な部分が多いですが、西田遺跡では、条里水田のすぐ下の調査面で、9世紀後半と考えられる竪穴建物跡や掘立柱建物跡などの遺構が確認されており、それ以降に開発が行われたと推測されます。また、近年発掘調査された南部拠点地区遺跡群No.11では、大畦畔交差点の下から見つかった溝跡から8世紀中頃の須恵器や土師器の坏と土師器の大型鉢が出土しており、農耕儀礼が行われていた可能性が出てきました。そのため、条里水田の施行時期は8世紀中頃にさかのぼる可能性もあります。



浅間B軽石下の水田跡（南部拠点地区遺跡群No.12）

白い線が水田の畦畔



大畦畔下の溝跡と農耕儀礼の様子

（南部拠点地区遺跡群No.11）

◆弘仁の大地震の爪痕

④南部拠点地区遺跡群No.4

弘仁9(818)年、関東地方を震源とした大地震が発生しました。本地域でも地震の揺れにより砂と水の混じった泥水が、地下から地上に向かって噴き出した跡（噴砂）が見つっています。



噴砂検出状況

◆天仁元年（1108）年の大噴火からの復旧痕跡

⑤横手湯田遺跡

天仁元（1108）年の浅間山噴火は、右大臣藤原宗忠の日記「中右記」に「砂礫や灰が国中に降り注ぎ、国内の田畑はすべて壊滅し、一国の災害でいまだこれほどのものはなかった」と記されるほど、甚大な被害をもたらした。浅間B軽石が広範囲に堆積しました。復旧作業は条里水田の大畦畔に沿って溝を掘り、掘り上げた土と軽石を混ぜることによって土壌化し、敷きならして耕土としていたようです。横手湯田遺跡では浅間B軽石で埋没した水田の畦畔をほぼなぞるような水田面が上層に見つかり、埋没後、比較的短期間のうちに復旧が行われたことがわかっています。



浅間B軽石で埋没した水田(左)とその上位層から見つかった水田跡(右) 群馬県提供

◆天明3（1783）年の大噴火からの復旧痕跡

⑥横手南川端遺跡

天明3（1783）年の浅間山噴火に伴う泥流（天明泥流）や降下した浅間A軽石は本地域にも甚大な被害をもたらしました。利根川東岸に近接している横手南川端遺跡の西端には天明泥流が台地上に押し寄せた状況が確認されています。こうした中で溝状に細長く掘り上げ、そこに軽石を埋め込み、下部の土壌で覆いかぶせる「天地返し」による復旧が行われた痕跡が、横手南川端遺跡、横手湯田遺跡、下阿内老町遺跡、下阿内前田遺跡などで見つっています。



天地返しが行われた土坑跡 群馬県提供

◀天地返し模式図